

2 上塩尻村における親族構造と社会・経済組織：導入

愛媛大学法文学部 高橋基泰

近世社会はたてまえはすこぶる強固なのだが、実相はずいぶん異なると考えるべきである。本報告は、構築中のデータベースによる、上塩尻村の親族構造と周辺諸組織理解の導入を志す。

宗門御改帳および卯貫高畠名寄帳をつきあわせた。天保2年卯年貫高名寄帳に登場する者は、175名をかぞえる。この175名をさらに天保2年宗門御改帳と照合すると100名が特定した。30名ほどの他村からの入り作を除くと3分の2程度の特定となる。天保5年の丑貫高畠名寄帳をも用い3年間の差額計算をすると、175名中157名が続いて登場し、さらにその内中98名（62%）が変化なし、あっても微細であった。71名が変化なし、である。1貫以上の増加は2名のみであった。他方減少では減少は33名、うち8名が1貫以上の減少であった。すると天保2年間から天保5年間の3年間では、天保4年の凶作を含めた経済的な圧迫がこれらの数値に反映するようである。上塩尻村のように蚕種業の盛んでおそらく現金収入が大きな意味合いを持つ村では、こうした貫高および土地の持ち高および「階層」の分析には、さらに考証がいる。

各家集団と蚕種商人との関係を調べると、著名な塙田茂平に代表される塙田家でも蚕種商人を出さない家系がある一方で、主要五家（春原、佐藤、清水、馬場、山崎）でも、そのマケ本家を中心に密接な生活関係を持つ同族集団が蚕種商人を輩出しているデータを見出せるという（長谷部弘「人の移動と社会組織」1998年、214-7頁）。同族内の戸数を天明5年から天保10年までのほぼ50年間の時期でたどると、主要五家および塙田・西原家は村全体の戸数の増大に比例して増加をみせている。それ以外の家はほとんど変化がない。完全な分極化ではないにせよ、大小の差異がより顕著になっていると言えそうである。戸数の増減が日常の生活にどのような影響をもたらしたのかはより精査が必要であるけれども、全体として独立した生計を営むに足る生活資源を保ちうる人間が増えたということは十分に考えられる。分家にもそれ相応に資産がいるはずである。では家名・家産の長子相続は農民レベルでどれほど遂行されたのか。

天明3年から安政7年までの約80年間で、判頭（戸主）の代替りは352件であった。うち次代が先代の名前を踏襲したのは37件で約1割である。やはり裕福で名前が屋号化したような「由緒のある」家系に多い現象であろう。しかし、思ったほど一般的でないとも言える。また、長男ではない人間が次代となるのは148件で4割以上であった。そして人別帳で長男であったとしても、当時の乳幼児死亡率の高さからして必ずしも生まれながらの長男がそのうちどのくらいか、はまた不明である。複数男子がいない事例も相当にあった。だが、それにしても半数以上「長男」というデータは長子相続の通念を保つにはおそらく十分であろう。次男が兄をさしおいて、という事例は6件にとどまるのである。

文化年間は分家の頻繁な時期である一方、従弟の件数が多い。従弟による代替りは、分家も含めた非長男の事例全体の4割ほどを占める。ところが人別帳で従弟が後退する時期は、前回報告したように、各戸の平均夫婦数が、2.1組から1.1組へと半分に減じ、1戸あたりの平均人数が9人弱から5人ほどに減じる時期でもあった。いわゆる単婚小家族化がごく短期間に進行したらしく、非長男以外による代替りは全体の3割以下に減退し、「長男」が台頭していった。